

「はさみ」雑考

小池三枝

髪 作里木 木密 文 蟹 虫 碁の手

銀盤 詩の平仄 鞆 絹のふし 鍛冶屋

地獄の責 外科 爪 箸 肴 釘拔 撰

縫物 板 またぐら 足 手 耳 打薄

右にあげたものは、延宝四年(一六七六)

刊の俳諧付合語集『類船集』の中の「鉄」
に関する語である。これを見ると、当時の

人々が鉄という語から連想するものは、は
さむもの・はさまれるものから外科や裁縫
の鉄・蟹のはさみまで極めて範囲が広く、
現代の私達が連想する語よりも多様であっ

たように思われる。

鉄は物を切る道具である、と私達は考え

る。従って私達が鉄から連想するものの多

くは、切ることに関わる語であるうが、

『類船集』の記載は、切ることだけでなく、

物を間にはさむことを通してさまざまな連

想が働くことを示している。

舌切雀は鉄で舌を切られる。てるてる坊

主はお天気にしなないと首をチョンと切られ

る。これらにはぎり鉄で切るのだろう。童

謡の中で蟹の床屋はチョキンと鉄を使って

兎の耳を切ってしまう。ところが狂言の

『蟹山伏』では、蟹の精が現われ、自分の
念力を誇る山伏の耳をはさんで苦しめる。
切りはしない。

切るための刃物を「はさみ」と呼ぶ。辞

書によれば、物をはさむようにして切るか

ら「はさみ」なのだとの説明がある。確か

に、刀の類は一枚の刃で押し切るのに対し

て、はさみは二枚の刃の間に物をはさみな

がら切る。しかし、考えてみると、はさむ

ことと切ることは本来別な管である。それ

なのになぜ「はさみ」と呼ぶのだろうか。

現在用いられている「鉄」という字は、

「はさみ」という名にふさわしく、^{つぐ}「夾」である。しかし漢和辞典によれば、中国ではいわゆる「はさみ」を意味するよりも、かなばし・刀剣のつか・刀剣などの意味で使われた字である。かなばしはいうまでもなく挟む道具であり、また刀剣のつかは刃の元を挟んで作られた部分であるから、「鉞」は本来は挟むものを示す字であらう。中国で日本の「はさみ」に当る語は、「鉞刀」「翦(剪)刀」などである。「鉞刀」は二枚の刃が交叉する形に作られたはさみを意味するものであるし、「翦刀」はぎり揃える刃物という意味であらう。

日本でも平安時代の辞書『倭名類聚鈔』では、鉞の字を用いず、「はさみ」と呼ぶ二種の「鉞刀」が出てくる。一つは容飾具としての「鉞刀」、他は鍛冶具として鋼鉄を切る道具の「鉞刀」である。前者は『源氏物語』の夕霧や手習の巻で、出家する場面に取り出される「はさみ」であり、化粧

道具の一つとして櫛箱に入れてあるものだった。後者は多分交叉形の鉞であらうが、容飾具の「はさみ」はどういう形であったらうか。江戸時代の化粧具としてのそれはにぎり鉞である。もし、平安時代のものも同じであるとすれば、「鉞刀」の字はu字形の「はさみ」には合わない。にぎり鉞を表わす漢字が見当らなかつたのであらうか。因みに『和名類聚鈔』には、裁縫具として、中国でのもう一つのはさみの名称「翦刀」をあげている。しかし、これははさみではなく「ものたちかたな」と呼んでおり、江戸時代まで使われた裁断用の小刀のことであった。

『類船集』にははさみを「鉞」と書いているが、江戸中期享保二年板『書言字考節用集』によれば、「夾剪」「鉞刀」「鉞」の三字を記し、「鉞」は「俗用此字」としている。この編者は、中国での「鉞」の字が別の意味をもっていることを知っていたのであらう。又、正徳二年の『和漢三才図会』には、百工具の中に「鉞」「鉞刀」をあげ、容飾具の中に「翦刀」として「翦子、鉞刀」の字をあげているが、和名抄で鉞刀をはさみと訓じている事は未詳と記している。「翦刀」は、外科用の膏薬紙を切る「夾剪」(現在の花鉞形)と「摺剪」(にぎり鉞)の二種を图示している。この外、元禄版『女重宝記』には「鉞子」とも出てくる。はさみにはこのように種々の漢字が当てられ、明治以降次第に「鉞」の字に統一されていった。

日本の鉞がにぎり鉞に代表されると考えるならば、それは本来毛抜きなどと同じく鉞むものとして出発したのではないだろうか。それは刀類や交叉型の鉞よりも刃の鈍いものだったかもしれない。切るものではないが「はさみ」と呼んで柔らかいニュアンスをもたせたもの——それが「はさみ」である。(お茶の水女子大学)